

from:

林志妍
(大学院生)



韓国から見た日本の保育

韓国人留学生の私には、韓国人の保育者と共に日本の保育現場を訪れる機会がしばしばある。そのおかげで私は、日本の保育を見た韓国の保育者たちの反応や感想を近くで聞くことができる。私の見ている限り、韓国の保育者は、日本の保育から多かれ少なかれ強い印象を受ける。そして、その感想は私に日本の保育の魅力をあらためて感じさせてくれる。

本稿では、この数年間に日本の保育現場を訪れた韓国人保育者の典型的な感想を伝えたい。特にここでは、昨年七月、東京、埼玉の保育園を見学した保育者の方々の声を拾ってみた。なお、私が同行した韓国の研修団は「韓国生態幼児教育学会」が主催した研修団であり、二十年近く毎年日本の保育現場を訪問し続けてきたグループである。この研修団では特に自然とのかかわりと遊びを重視する保育園・幼稚園を選び、見学を行うのが特徴である。当然、研修団にも自然や遊びを重視する

林志妍 (いむじよん)

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻 保育・児童学コース博士後期課程。日韓の保育の比較と学び合いの可能性に関心を持っている。

保育観を持つ保育者が多く参加している。そのため、本稿の中で扱う日本の保育現場が日本の典型でもなければ、ここでの感想が韓国人保育者を代表するものでもないことをあらかじめ述べておきたい。

子どもの遊びに最適な環境

見学施設に入ると、韓国の保育者はたいいて、「わー」と歓声を発する。広い園庭、保育室からすぐ園庭に出られる開かれた環境、広い砂場と土山、子どもたちが登れる木などは、韓国の保育者の目を引きつけるようだ。

アン園長は、何年も前に日本の幼稚園で見た、木にぶら下がっているブランコをいまだに覚えていた。「大人二人がやっと抱えるくらいの大きくて高い木にブランコがぶら下がっていました。子どもたちは自分の背よりもずいぶん高い所までブランコをこいでいました。とても危険だと思って衝撃を受けながらも、

こうすると子どもたちは本当に楽しく遊べるだろうと思いました」

そして必ずと言っていいほど韓国の保育者たちの目を引くのは、土山の上で遊ぶ、はだしの子どもの姿だ。今回が二度目の研修だというパク先生は、日本ではだして遊ぶ子どもたちを見てとても楽しそうと思って、自分の園でもはだして遊ぶことを取り入れたそうだ。

「私の園でも）冬なのにまだはだして遊ぶ子どもたちがいます」。見学先の子ともたちに交じってはだしになり、土山から滑り下りながらパク先生は言った。アン園長も、土山はぜひ自分の園につくりたい環境だけれども、現実的には実現するのが困難だと残念そうに言った。

研修団によるアンケート調査では、研修参加者にとって最も印象的だったのは「園庭に面して直接出入りできる保育室の空間構造」だったらしい。確かに、保育室から屋外の遊び場までの子どもの動線を短くした日本のよ

うな建物の構造は、韓国では見かけにくい。

自由で自立した日本の子ども

韓国の保育者たちは、二〜三時間の短い見学ですれ違った子どもたちの姿を鮮明に覚えていた。そしてその姿は、韓国の子どももの姿とは異なっている。

「一人で園庭の端まで行って戻ってきた子がいましたよ。(韓国では)子ども一人で(大人のいない)園庭の端まで行けないでしょう。私たちは子どもを監督しなければならぬから。なのにその子は平気で一人で何かを済ませて、保育室に戻ってきました」。日本の保育者を見るのは初めてのパク園長は、ただ一人で園庭の隅で遊びに集中している子どもを見て感激していた。その姿から、保育者の過剰な保護を受けず、のびのびと自然に育つ子どもの姿を見たようだ。

「(子どもは)保育者がある程度ケアしてあげ

ないといけないと思っていました、それが全部崩れました。子どもは(水遊びの後)自分で下着をはき、体を拭いていました。保育者も、手伝おうか? と聞く気がまったく見えませんでした」。今年四年目の幼稚園教諭のキム先生は、不思議そうに語っていた。

韓国の保育者は共通して、見学先の子どもが自分の園児より、自由で自立していると語る。二歳くらいの子がゆつくりと服を着たり畳んだりする姿、テーブルを拭いたり片づけをする姿に驚く。水をいっぱいためたバケツを持ってヨチヨチ歩く子どもを見て、水がこぼれそうなので助けようとしたら、周りの日本人保育者が平気でその姿を見ているので手伝うのをやめたという幼稚園の先生もいた。

子どもと遊ぶ日本の保育者

韓国の保育者たちにもう一つの強い印象を残すのは、彼らを迎える見学先の保育者の態

度だと思う。見学者を意識して特別なことを見せようとする様子も、逆に隠そうとする様子もない。ただ普段の保育の姿をわれわれ見学者に公開するだけ。それで、韓国の見学者は、子どもと遊んだり食事をしたりする日本の保育者の本当の生活に触れることができる。

韓国の保育者は、その保育者の生活の中でも、子どもと遊ぶ姿を最も印象的に感じていた。「(見学先の保育者たちは)とても幸せそうに、とても自由に子どもたちと遊んでいます。保育者は泥団子を作り、その中で楽しんで遊んでいました。私たちは腕を組んで子どもを見張っているんじゃないですか……」。何年前かのインタビューで幼稚園教諭のり先生がうらやましげに言っていた。研修後に会ったある保育者は、園に戻って日本の保育者のように子どもと楽しく遊ぼうとしたが、やらなければならぬ仕事のことがつぎつぎ頭に浮かび、遊ぶ余裕を持てなかつたとつぶや

いていた。私は、日本の保育者の姿が韓国人保育者の心に、子どもとの楽しい遊び、幸せな時間への強い願いを呼び起こしている気がする。

日韓の保育の「違い」をみる

韓国の保育者が長年日本の保育を訪ね続ける理由は何だろう。韓国の保育者一人ひとり、日本の保育現場についてそれぞれ違う面に注目するが、彼らは共通して言う。「ここで遊ぶ子どもたちは本当に楽しそう！ 幸せそう！」。木登りであれ、土山であれ、子どもたちと遊ぶ保育者の姿であれ、韓国の保育者が注目するのは、韓国でも実現したい、子どもを幸せにする環境だった。幸せな子どもの表情に日韓の変わりはなく、保育者であればそれが感じ取れる。そして、そのような環境をつくってあげたいという思いも日韓とも一緒ではないか。私はこれが毎年韓国の保育者が日本を訪れる理由だと思う。